

- 日時：2020年12月6日（日）
- 場所：立川教会
- 説教題：「神にはできる。」
- 聖書：新約マルコによる福音書10：1-31（新p80）
- 讃美歌：265「天なる神には」※1番のみ。
255「生けるものすべて」※1番のみ。

お早うございます。

待降節第2主日を迎えました。

週報の裏面にも書きましたが、大阪では、医療に関わる緊急事態宣言が出されました。医療崩壊が近づいていることを知らせる宣言です。

皆様もご承知のように、他の病気による患者への医療と、コロナウイルスによる重症患者への医療の一番の違いは、携わる医師・看護師と患者が一对一では済まないことです。コロナウイルスによる一人の重症患者が運び込まれることによって、多くの医療従事者が必要となり、他の患者への対応が著しく困難になることが伝えられています。

東京都でも、医療が逼迫しています。

にもかかわらず、なぜGo Toトラベルが中止にならないかと言うことです。

大阪と札幌に加え、東京都でも65歳以上の人へは旅行を控えるようにとの指示が出されましたが、コロナと経済のバランスをどう取るかが、私たちが考えている以上に深刻であると言うことです。

先の緊急事態宣言下、経済がストップしたことにより、多くの人々が生活困窮などに陥り、生きる希望を失いました。そのことは数字に表れています。自ら命を絶って行く人、その中でも女性の数がこれまでになく多いのです。この8月には前の年の同じ月の42.2%増、10月には82.6%増、つまり1.8倍となり、その中でも40代の女性の自死の数は、前の年の同じ月の2.3倍です。

学校現場も同じです。全国一斉休校により、多くの子どもたちが友だちにも会えずに辛い日々を送りました。

にもかかわらず、何としても感染を抑えなければなりません。命に関わることだからです。特に、教会のような高齢者が多く集う所では、細心の注意を払う必要があります。コロナに加えてインフルエンザが流行り始めるこの冬を、一人として病に罹ることなく、健康を保ち、乗り切るために、今何をなすべきかを来週の役員会で話し合う予定です。

聖書に入りましょう。

今日の聖書箇所では、マルコは3つの話しを記しています。

礼拝短縮を実現するために、その中の一つを選んで学びたいと思いますが、1番目と3番目の話しに少しだけ触れます。

先週の祈禱会では、1番目の話しを取り上げました。離縁についての箇所です。

話題沸騰で、話しは大いに盛り上がりました。

神が合わせた者を人は離してはならないと言う結婚の時の誓約があります。

しかし、夫婦仲が冷えた時、それでも共に生活する意味はどこにあるのか、あるいは、同性同士の結婚をどう考えるかなど、改めて真摯に向き合うべき問題であることを知らされました。

3番目の話しは、金持ちの男の話しです。

私は、今日の礼拝ではこの箇所を取り上げようと考えていました。説教題もこの箇所から選んでいます。ところが先週経験したある出来事によって、今日はこの箇所ではなく、2番目の子どもを祝福する話しから学ぶことにします。この所からも又、説教題と深く関わることを学べると思うからです。

10章13節です。

13 : イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。

14 : しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。

15 : はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

16 : そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

私は、この場面は、マルコによる福音書の中でも、眩（まぶ）しいくらいに光り輝いている場面だと思います。

何と言う、喜びと希望に満ちた、又何と言う、心躍り、慰めに満ちた場面でしょうか。

神の国に入るのに必要なのは、ただ子供のように神の国を受け入れれば良いと言うのです。それ以上の何も求められない。難しい聖書解釈も必要無ければ、旧約聖書を読むヘブライ語も、新約聖書を理解するギリシャ語も必要ないので。ただ、神様を信じ、神の国

を信じて受け入れさえすれば、神の国に入れると言うのです。

15節を見て下さい。

15 : はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこ

に入ることはできない」

とイエス様は言われました。

13節にある、弟子たちが子どもを連れて来た人々を叱ったと言う弟子たちの気持は理解出来ます。来る日も来る日も、イエス様の行く所、イエス様を求めて

群衆が押し寄せて来ました。イエス様は、人々への対応の中で、疲労困憊していたはずですが。弟子たちも又、疲れ切っていたのでしょう。

そこに、重い病を負った人ならともかく、母親の附属物としてしか人格を認められていない子供が連れられて来ました。弟子たちは思ったはずですが。「一体お前たちは何を考えているのだ。イエス様は疲れておられる。そして、これから又多くの人々に話しをし、病いを癒さなければならない。こんな大変な状況にいるお方の所へ、子供などを連れて来て煩わせるなど許せない」との感情が湧いたのだと思います。子供が憎いわけではありません。連れて来た人が憎いでもありません。弟子たちの師であるイエス様を慮（おもんばか）る気持が、人々を叱った行動となりました。

ところが、この弟子たちの気持が分かりながら、イエス様は、ただ注意したのではなくありません。その行動を憤ったのです。

今日、私たちが学ぶべき第一の問題がここにあります。

イエス様は、なぜ、憤るほどの怒りを弟子たちに覚えたのかです。

そのことを理解する鍵は、子供を連れて来た人々の思いにあります。

彼らは、子供たちをイエス様に抱いて欲しかったのです。

そして、祝福して欲しかったのです。

それだけ、イエス様を信じ、尊敬し、愛していました。

このお方に、我が子を抱いて欲しい、祝福して欲しいと。

私事ですが、母が私に教えてくれたことがあります。

「あなたは、賀川豊彦に抱いていただいたのよ」と。

賀川が、両親の通っていた教会に特別伝道集会の講師として来た時のことのようにです。

恐らく生まれて間もない私だったのだと思います。

母が賀川に抱いて欲しいと言ったのでしよう、そのようなことを聞きました。

それは、私利私欲の世界ではありません。

この時の人々もそうでした。

ただひたすら純粋にイエス様に真つすぐに向き合い、我が子のために祝福を求めました。

その瞬間、これらの人々の願いと、子供たちと、イエス様との間に生まれたのは、神の国の先取りでした。

しかし、弟子たちにはそれが分かりませんでした。

イエス様がペトロを叱りつけたように、弟子たちは、ここでも又イエス様の煩いや疲れを心配する余り、神の国のことを思わず、人の事を思っていたのです。

最後に、二つのことを紹介し、今日のメッセージを終わりたいと思います。

先週、突然私の携帯にメールが届きました。

友人の牧師からのメールでした。

その内容は次のようなものでした。

彼が牧会する教会の附属幼稚園で、つい最近起きた出来事です。

その教会の幼稚園の保護者でコロナに罹った方が出てしまったと言うのです。

当然、そのクラスでは、保護者全員と園児全員のPCR検査が実施されました。

幼稚園の先生方は、陽性の園児が出ないことを祈る一方、罹患した保護者とそのお子さんが、他の保護者から責任を問われたり、心ない言葉をかけられたりすることを心配していたそうです。

ところが、集団検査の日、保護者たちは笑顔で検査を受けながら、幼稚園の先生方に、「先生！頑張って」と声をかける一方、「感染されたご家族のためにお祈り下さい」と連絡を回したとのことでした。それだけではなく、園児からも「お家で、コロナになったお友達のためにお祈りしたよ」との報告がなされたとのことでした。

驚きました。

このような幼稚園があるのかと心打たれました。

なお、検査を受けた園児や保護者は皆陰性だったとのことでした。

あと一つのことです。

今作成している『70年史』に寄せられた文章です。

この方は、最初は「私は書けそうもない」と言っておられたのですが、寄せて下さいました。この方には、「礼拝で紹介したい」とお伝えしてあります。

70周年を覚えて

主の御名を賛美いたします。

立川教会 70周年おめでとうございます。

坂の途中に佇むこの立川教会に神様によって招かれ、礼拝を捧げることが許されている幸いを感謝いたします。

私がこの世に生まれてから立川教会にたどり着くまでには40年以上の年月がありました。

随分と廻り道をしたようにも思いますが、その昔旧約聖書にあるように荒れ野を彷徨った民と同じような年月を彷徨っていたとも思います。

その間も神様は私が的外れなことをしていたとしても私の事を『どこにいるのか？』と私に問い続けて目を離さずにいてくださっていたように思います。

ずっと自分の居場所をさがし続け彷徨（さまよ）っていたように思います。

主の十字架。十字架を見上げること。

それが私が生まれてきた理由であり、十字架の下が私の居場所なのでしょう。

ある日自転車をこぎながら強く胸が暖かくなることがありました。

『主われを愛す主は強ければ、

われ弱くとも恐れはあらし』

口ずさんでいると、ああ。なんと心強いのでしょうか！胸が暖かく満たされていました。

主が共にいてくださることを感謝します。

私は難しいことはわかりません。

みことばもなかなか暗誦できません。

それなので

『主われを愛す主は強ければ

われ弱くとも恐れはあらし』

と、うたいます。

うたいつづけていきたいです。

神様。

いつも私と共にいてくださることを感謝いたします。

以上です。

まるで、幼児（おさなご）のように神の国に向かっている文章でした。

『70年史』には、すでに20名を超える方から証しが寄せられました。

一つひとつに目を通しながら、皆さん珠玉のような文章です。型通りのお祝いの文章など、一つもありません。それぞれがご自分の信仰を語り、生活を語り、思い出を語り、交わりを語っています。

教会の土台は、信仰を持つ信徒の交わりによって形成されます。お互いが信頼し、信実の交わりの上に立つ教会は、嵐に襲われても揺らぐことはありません。そのような交わりを形成する意味で、寄せられた文章がどれほど大切な意味を持つかを知らされています。

子どものように神の国を信じ、受け入れる者となれることを神様に祈りたいと思います。私たちの力及ばずとも、神様には出来るのです。

祈りましょう。